



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究(11)
Author(s)	稲見, 正浩
Citation	東京学芸大学紀要. 第2部門, 人文科学, 56: 125-140
Issue Date	2005-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/2707">http://hdl.handle.net/2309/2707</a>
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

『プラマーナ・ヴァールティカ』  
プラマーナシッディ章の研究 (11)\*

稲見正浩

哲学・倫理学\*\*

(2004年9月30日受理)

II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-9. 再生の原因

[ 問い ] 「どうして [ 次世に ] 再生するのか? 」<sup>1)</sup>

答える。

我執 (ātmasneha) をもつ者は、他の有情に導かれるのではなく、[ 自ら、] 苦を捨て楽を得たいと望むことによって、劣った場所 (母胎) をとる。(80)

ananyasattvaneyasya hīnasthānaparigrahaḥ /

ātmasnehavato duḥkhasukhatyāgāptivāñchayā // 80 //

主宰神 (Īśvara) [ の存在 ] は否定されるのだから<sup>2)</sup>、[ 我執をもった者は主宰神などの ] 他の有情に導かれるのではなく、[ 自ら、] 劣った場所をとる、すなわち、母胎 (garbha) を所依としてとる<sup>3)</sup>。我執をもつ者には、すなわち、渴愛 (tṛṣṇā) をもつ者には、苦を楽とみなす転倒 (viparyāsa) があり、彼は苦を捨て楽を獲得することを望むことによって [ 劣った場所をとる ]<sup>4)</sup>。なぜなら、渴愛をもつ者は、苦を楽であると転倒して理解し、自分自身に執着し<sup>5)</sup>、胎という場所を楽の原因であると考え、生を引き起こす業によって、[ 母胎を ] とるのである。

また、それ故、

苦に対する転倒知 (viparyāsamati) と渴愛 (tṛṣṇā) とが生まれる者の束縛の原因である。その両者がないような者は生を得ることはない。(81)

duḥkhe viparyāsamatiḥ tṛṣṇā cābandhakāraṇam /

janmino yasya te na sto na sa janmādhigacchati // 81 //

苦に対する転倒知と渴愛とが生まれる者の<sup>6)</sup>束縛の原因、すなわち、縛りつけられる原因である。渴愛によって、我執も [ その ] 原因であるので<sup>7)</sup>含意されていると知るべきである<sup>8)</sup>。一方、我執が根絶された者にはその両者が、すなわち、転倒知と渴愛とが、ない (na sto = na vidyete) ので、彼は生を得ることはない<sup>9)</sup>。

II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-10. 中有<sup>10)</sup>

[ 反論 ] 「[ 来世に ] 行くことと [ 前世から ] 来ることは知覚されない。」[ 答 ] 感官が鋭敏ではないから知覚されないのである。弱視の人にはかすかな煙が見えないのと同じである。(82)

gatyāgatī na dṛṣṭe ced indriyānām apāṭavāt /

adr̥ṣṭīr mandanetrasya tanudhūmāgatir yathā // 82 //

[ 反論 ] 「来世に行くことと前世から来ることは知覚されない。」<sup>11)</sup>

[ 答 ] 感官が鋭敏ではないからその非知覚 (adr̥ṣṭīḥ = adarśanam) があるのである。微細な中有身 (antarābha-

\* A Study of the Pramāṇasiddhi Chapter of Pramāṇavārttika (11) / Masahiro INAMI

\*\* 東京学芸大学 (184 8501 小金井市貫井北町4 1 1)

vaśarīra)<sup>12)</sup>にその両者(往来)がある。弱視の人にはかすかな煙が見えない(agatiḥ = adarśanam)のと同じである<sup>13)</sup>。知覚できないもの(adṛśya)は知覚されないからといって存在しないわけではない。

[反論]「物質的形態をもつもの(mūrta)は物質的形態をもつ別のものに入り込むことはない。抵触があるから。中有身も物質的形態をもつものである。[よって、物質的形態をもつ母胎に入り込むことはできない。]」<sup>14)</sup>

だから,[これに答えて]述べる。

物質的形態をもつものであっても、微細であることによって、或るものは或るものに対して抵触がない<sup>15)</sup>。水のように。また、金に対する銀のように。また、知覚されないからといって必ずしも存在しないわけではない。(83)

tanutvān mūrtam api tu kiñcit kvacid asaktimat /

jalavat sūtavat dhemni nādr̥ṣṭer asad eva vā // 83 //

物質的形態をもつものであっても、微細であることによって、或るものは或る物質的形態をもつものに対して抵触がない<sup>16)</sup>(asaktimat = apratighāvat)。壺に対する水のように。また、金に対する銀のように。なぜなら、水と水銀は物質的形態をもつものであっても、[それぞれ]壺と金に入り込むことが実際に見られるのである。

[反論]「中有身が抵触がない<sup>17)</sup>ことは実際には見られない。」[答]また、知覚されないからといって必ずしも存在しないわけではない<sup>18)</sup>。中有身はそのようなもの(抵触がないもの)として存在しているのである<sup>19)</sup>。

## II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-11. 身体は単一にせよ多にせよ心の原因ではない

### II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-11-1. 身体は単一な全体ではない

さらに、身体が心の質料因であるなら、それは1) 全体(avayavin)を本性とする単一のものか、2) 原子の集合体を本性とする複数のものである。このうち、[身体が]1) 全体を本性とするものなら、それは、1 a) 手などの諸部分と同じものか、それとも、1 b) それらとは別のものかである。この両方(1 a)と1 b))とも否定するために述べる<sup>20)</sup>。

[身体は 全体 を本性とする単一のものではない。]手などが揺れればすべてが揺れることになってしまうからである。なぜなら、単一のものに、[揺れるという運動と]矛盾する運動はありえないのだから。(84a c)

pānyādīkampe sarvasya kampaprāpter virodhinaḥ /

ekasmin karmaṇo 'yogāt (84a-c)

[身体は 全体 を本性とする単一のものではない。]手などが揺れればすべてが揺れることになってしまうからである。もし、単一のものである<sup>21)</sup> 全体 [としての身体]は手などの諸部分に他ならないなら、手などが揺れれば足などもすべて揺れることになってしまう<sup>22)</sup>。なぜなら、単一なその[身体に]、揺れる[という運動]と矛盾する、揺れないという運動はありえないのだから。しかし、実体(dravya)は単一であり、揺れ[という運動]はそれに内属しているのだから、全部が揺れることになる<sup>23)</sup>。

諸部分が単一の全体を本性とするものであるという証因は[目下の]他者の暫定的承認(abhyupagama)によって確立している。[そしてそれによって、]全部が<sup>24)</sup>揺れるという必然的帰結(帰謬 prasaṅga)がある。しかし、[実際には全部が]揺れることはない<sup>25)</sup>。よって、論証されるもの(sādhya)が[実際には]ないということによって、[その前提の、諸部分が]単一の全体を本性とするということもない<sup>26)</sup>という帰謬還元(prasaṅgaviparyaya)がある。これと同様に、後に説明される帰謬とその還元も理解されるべきである<sup>27)</sup>。

[反論]「全体は諸部分とは別のものである。だからこそ、一部分が揺れていても、別の部分は揺れることはないのである。」<sup>28)</sup>

そうでないなら、[全体は部分に内属しているのに、部分とは]別個のものとしてあることになる。

syāt pṛthak siddhir anyathā // 84 //

そうでないなら、別個のものとしてあることになる。部分と全体が別のものであるなら、別個のものとして、つまり、揺れている部分とは別のものとして、それに内属している揺れていない全体がまさにその部分にあることになろう。布と水のように<sup>29)</sup>。

この場合も、部分と全体が別であることは〔目下の〕他者の暫定的承認によって成立している証因である。〔そしてその結果、部分に内属している全体が部分とは〕別個にあることが<sup>30)</sup>必然的に帰結する。（帰謬）〔しかし、他者の説では全体は部分とは別個にあることはない。したがって、〕論証されるものが〔実際には〕ないのだから、〔その前提の、部分と全体が別のものであることという〕論拠もないという帰謬還元がある<sup>31)</sup>。これと同様に、後に説明される帰謬とその還元も<sup>32)</sup>、〔理解されるべきである〕

〔部分と全体が別のものでないなら、〕一部が覆われれば、全部が覆われることになる。〔部分と全体が別のものであるので、部分は覆われても全体は〕覆われないというなら、〔覆われている部分に対しても覆われていない全体が〕見えることになる。また、〔部分と全体が別のものでないなら、〕一部が赤く染められれば〔全部が〕赤いことになってしまう。〔部分と全体が別のものであるなら、赤く染められた部分に〕赤く染められていない〔全体があると〕知られることになる。（85）

ekasya cāvṛtau sarvasyāvṛtiḥ syād anāvṛtau /

dṛṣyeta rakte caikasmin rāgo 'raktasya vā gatiḥ // 85 //

また、〔部分と全体が〕異ならないという説では、一部が覆われれば、全部が覆われることになる、という必然的帰結がある<sup>33)</sup>。〔部分と全体が〕異なるという説に基づいて、全体は覆われないと認められるなら、覆われている部分においても、覆われていないこれ（全体）が見られることになる、という必然的帰結がある<sup>34)</sup>。

また、〔部分と全体が〕異ならないという説では、一部分が赤く染められれば、全部に赤い色が見られることになる、という必然的帰結がある<sup>35)</sup>。一方、〔部分と全体が〕異なるという説では、赤く染められた部分に赤く染められていない全体が知られることになる<sup>36)</sup>、という必然的帰結がある<sup>37)</sup>。

〔そして、これらの〕全ての場合に、〔その論拠によって〕論証されるものが〔実際には〕ないことによつて〔その前提の〕論拠はない、という帰謬還元がある<sup>38)</sup>。それ（帰謬還元）を〔次のように〕述べる。

このことから、単一な集合体は存在しない。〔部分と全体が〕同一でない場合も、前と同じである。

（86ab）

nāsty ekasamudāyo 'smād anekatve 'pi pūrvavat / (86ab)

このことから、すなわち、揺れることなどという論証されるべきものが存在しないことから、部分の集合体である単一の全体は存在しない<sup>39)</sup>。部分と全体が同一でない場合も、前と同じである。すなわち、〔部分と全体が〕異なるという説の場合と同様に、〔その論拠から〕論証されるものが〔実際には〕ないことによつて〔その〕論拠はないという、帰謬還元がある<sup>41)</sup>。

あるいはむしろ<sup>42)</sup>、〔帰謬と帰謬還元ではなく、〕身体などの、知覚によって知られる基体において、揺れると揺れないなどという相矛盾する属性が結びつくから<sup>43)</sup>という自立した証因（svatantrahetu）に基づいて、〔身体等が〕単一であることの否定が論証されるべきである<sup>44)</sup>。

## 略号表（追加）

### 【テキスト】

- |             |  |
|-------------|--|
| CS          | <i>The Charakasaṃhitā of Agniveśa</i> . Ed. Vaidya Jādavaji Trikamji Ācārya. 1st ed : Nirnaya Sagar Press, Bombay 1941 ; 4th ed : Munshiram Manoharlal publishers, New Delhi 1981.   |
| NKand       | <i>Nyāyakandalī being a commentary on Prasastapādabhāṣya, with three sub-commentaries</i> . Ed. Dr. J. S. Jetly and Vasant G. Parikh. Gaekwad's Oriental Series No. 174. Varodara : Oriental Institute, 1991.                                    |
| PVinṬ (Jñ) | <i>Pramāṇaviniścayaṭīkā of Jñānaśrībhadrā</i> . Tibetan translation. sDe dge ed. No. 4228.   |
| ŚVK         | <i>Kāśikā of Sucaritamīśra in : Mīmāṃsā Ślokaṅgīyā with the Commentary Kāśikā of Sucaritamīśra</i> . Ed. K. Sambasiva Sastri. Trivandrum Sanskrit Series Nos. 23, 29 and 31. Originally Published in 1913. Repr. : CBH Publication, Madras 1990. |
| TUP         | <i>Tattvopaplavasīṃha of Shri Jayarasi Bhatta</i> . Ed. Pandit Sukhlalji Sanghavi and Rasiklal C. Parikh. Gaekwad's Oriental Series No. 87. Baroda 1940. Repr. : Bauddha Bharati Series No. 20, Varanasi 1987.                                   |

【参考文献】

- Dharmendra Nath Shastri [1964]: *The Philosophy of Nyāya-Vaiśeṣika and its Conflict with The Buddhist Dignāga School (Critique of Indian Realism)*. New Delhi. Repr.: 1976.
- Kajiyama, Yūichi [1999]: *The Antaryāptisamarthana of Ratnākaraśānti*. Bibliotheca Philologia et Philosophica Buddhica II. The International Research Institute for Advanced Buddhology. Soka University.
- 稲見正浩 [2003]: 『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究(10) 『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』第54集.
- 宇野智行 [1996]: 『アートマンをめぐる仏教とミーマーンサー学派との対論』 『日本仏教学会年報』第62号.
- 戸崎宏正 [1992]: 『法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第1章現量(知覚)論の和訳(8)』 『哲学年報』第51輯.
- 林 慶仁 [1995]: 『PV 83, 84の解釈をめぐって 中有の存在論証の有無と中有の有無』 『論叢 アジアの文化と思想』第4号.
- 船山 徹 [1990]: 『部分と全體 インド佛教知識論における概要と後期の問題点』 『東方学報』第62冊.
- 護山真也 [2001]: 『中有 に関する知覚と存在 ダルマキールティとブラジュニャーカラグプタの見解』 『仏教学』第43号.
- 山上証道 [1967]: 『avayavin について Naiyāyika と Bauddha との論争の一断面』 『印度学仏教学研究』15 2.  
[1968]: 『インド正統論理學派における「全體」の概念』 『東方学』第35号.  
[1976]: 『Bhāsarvajña の仏教批判( ) avayavin をめぐる論争とその発展 citrādvaita 批判』 『神戸女子大学紀要』第5巻.  
[1999]: 『ニャーヤ学派の仏教批判 ニャーヤブーシャナ知覚章解説研究』 平楽寺書店.

訳注

- 1) ブラジュニャーカラグプタはここで論敵からの以下のような反論を想定している。「[反論] そうすると、物質要素だけから生き物は生じるのではなく、別の生(前世)から母胎などの場所にやってくることになるが、もしそうなら、[生き物が自ら母胎などの]不浄な場所に行くことは正しくない。なぜなら、知をもったものがこのような[自ら不浄な場所に行く]ものであることは妥当しないからである。また、主宰神によって導かれることも認められない。」(PVBh 88, 20-22: yadi tarhi na mahābhūtamātrād utpattiḥ prāṇino janmāntarād āgamaṇaṃ garbhādisthāne / tato 'śucideśa-gamaṇam ayuktam / na hi prekṣāvān evaṃ bhavitum yuktaḥ / na ceśvarapreraṇam iṣyate / Cf. PVV (R) 333b6-7.)
- 2) 偈中の『他の有情に導かれるのではなく』(ananyasattvaneyasya) という言明によって、主宰神などによる輪廻転生の支配が否定されていることは他の注釈者達も述べている。デーヴェンドラブッディ『他の有情に導かれるのではなく』、すなわち、主宰神などの支配のない衆生は、...」(PVP 36b7-37a1: sems can gzhan gyis bkri min pa / dbang phyug la sogs pa la rag las pa med pa'i srog chags gang yin pa 'di ni / ...) ブラジュニャーカラグプタも、想定反論(上記注1)参照)において主宰神による再生に言及し、また、主宰神に導かれて再生することはありえないことをPVBh 89, 1 14で論じている。  
ミーマーンサー学派のクマーリラ・パッタはŚlokavārtika ātmavāda 60において「炎は風に導かれて(preryamāna)別の場所に移行することがあるかもしれないが、知(心)は如何なるものによっても原因の場所から[別の場所に]導かれること(preraṇa)はない。」と述べ、心が死後に何か他のものによって別の身体に移動させられることを否定している。(心が自ら移動することもv 61で否定される。)宇野[1996]参照。他のものによって導かれて再生するのではない、というダルマキールティと類似した問題意識をここに読み取ることができる。
- 3) 偈中の『劣った場所』(hīnasthāna)が母胎(garbhā)等を指すことは他の注にも述べられている。デーヴェンドラブッディ『劣った場所をとる』、すなわち、母胎という場所をとる」(PVP 37a1: dman pa'i gnas ni yongs su len // mngal gyi gnas yongs su len pa ste /) ラヴィグプタ『劣った場所を、すなわち、母胎を』(PVV (R) 334a1: ... dman pa'i gnas can mngal du. ...)
- 4) デーヴェンドラブッディはこのPV 80の内容を推論式で説明している。「[推論式44]【遍充】ある者が他の有情に導かれずに劣った場所をとるなら、それは我執をもつことによって、[自ら]苦を捨て楽を得たいと望むことを前提としている。例えば、八工は不浄な場所をとるが、[自ら]執着によって女の死体などをとるように。【主題所

属性】衆生も、他の有情に導かれずに母胎などという劣った場所をとる。これは 結果という証因 である。」(PVP 37a1-4 : gang zhiḡ sems can gzhan gyis bkri bar bya ba ma yin pa dman pa'i gnas yongs su len pa de ni bdag chags dang ldan pas sdug bsngal dang bde ba dor ba thob par 'dod pa sngon du song ba can yin te / dper na sbrang bu dag mi gtssang ba'i gnas yongs su len pa'am / 'dod chags candag bud med kyi ro'i lus la sogs pa yongs su len pa lta bu'o // sems can gzhan gyis bkri ba ma yin pa yang dman pa'i gnas yongs su len pa ste / srog chags nmams mngal la sogs pa'i gnas yongs su len to zhes bya ba ni 'bras bu'i gtan tshigs so // 点線部分は Vibh に類似したサンスクリット文がある。Vibh p. 40, fn. 1 : makṣikānām asucisthānagrahakāminām strīkuṇapaśarīraparigrahavat / )

これに続けて、デーヴェンドラブッディは、「自ら望まなくてもはからずも不浄な場所等に行くこともあるのだから、この推論式は不定因となるのではないか」という問題を取り上げ以下のように述べている。「人が眠りに落ちていたり、[ 酒などに ] 酔っていたりするときに、汚い場所や崖などの場所に落ちることがある。[ その場合、] 自分で望んでその場所をとり喜ぶというわけではないので、このことによって [ 上述の推論式の証因は ] 不定 [ 因 ] となるのではないかと懸念されるが、このような懸念はあってはならないので、『とる』(parigraha) という語によっては執着 (\* abhīveśa) が説かれているのである。」(PVP 37a4-6 : skyes bu gnyid log pa las ltung'am / bag med pa mi gtssang ba dang g.yang sa la sogs pa'i gnas su ltung ba de bdag nyid 'dod pa dang gnas de len pa dang mngon par dga' bas ma yin pa de latar na 'dis ma nges pa yin par dgos par mi gyur cig snyam pa de nyid kyi phyir / yongs su len pa'i sgras mngon par chags pa bstan pa yin no //) これによれば、偈中の『劣った場所をとる』(hīnasthānaparigrahaḥ) という部分は『劣った場所に執着する』あるいは『執着して劣った場所をとる』と訳すべきかもしれない。シャーキャブッディは推論式の証因部分を「執着を前提とした、劣った場所をとること」とみなし、このような限定をともなった証因は異類には存在しないので不定ではないと説明している。(PVT 106a1 : de ltar na gang mngon par chags pa sngon du song ba can gyi dman pa'i gnas ni yongs su len pa zhes bya ba khyad par dang bcas pa'i gtan tshigs mi mthun pa'i phyogs la 'jug pa med do //)

プラジュニャーカラグプタは以下のような説明をしている。「これは既に説いた。もし智慧をもった者であるなら、ものそのもの (svarūpa) が自ずと知られ、到達対象 (prāpya) は [ 知られ ] ない。それ故、誰も、村などの如何なるものに対しても行動を起こすべきではない。だから、最初から静寂にあるので輪廻などないことになる。ある場合には、智慧を持たないので、村などに行くことがある、というなら、母胎などの場所に行くことも [ 同様である ]。なぜなら、我執に導かれた者にとっては、転倒して理解されるので、劣ったものも取るべきものである。そのようなものがかの業の力である。それゆえ、人は他の有情に導かれずに、あたかも他によるかのごとく、そのように行くのである。劣った場所をとることも、楽を得て苦を捨てたいという願望によってある。パラモンが女召使の家に入ることと同じである。」(PVBh 88, 27-31 : uktam etat / yadi prekṣāvān bhavati svarūpasya svato gatir na prāpyasya / tataḥ kenacin na kvacid grāmādaḥ pravartitavyaṃ ata ādisāntatvāt saṃsāra eva na bhavet / atha grāmādigamaṇaṃ yathā kathañcid bhavaty apreṣāvattayā tathā sati garbhādidēśagamaṇam api / ātmasnehapreryamāṇasya hi hīnam api viparyāsād upādeya m̐bhavati / karmasaktir eva sā tādrṣī yenānyasattvaneyasya\* paratantrasyeva tathā gatiḥ / hīnasthānaparigraho 'pi sukhaduḥkḥāptityāgavāñchayā, srotriyasya dāsīveśmapraveśavat / \*yenānyasattvaneyasya とあるのを訂正。) この最初に述べられる、svarūpasya svato gatiḥ という文は PV 4d である。プラジュニャーカラグプタはその PV 4d の注で、勝義には自己認識があるだけであって、聖者には肯定的行動も否定的行動もないということを説いている。稲見 [ 1992b ] 参照。

- 5 ) PVV (M2) : iti viparyasta ātmani viparyastāḥ ātmani snigdho とあるが、PVV (M1) = PVV (M) ms : iti viparyastāḥ ātmani snigdho で読む。
- 6 ) PVV (M) ms : janmanaḥ とあるが、PVV (M1) = PVV (M2) : janminaḥ で読む。
- 7 ) PVV (M1) (M2)ともに hetuvad とあるが、PVV (M) ms により hetutvād に訂正して読む。
- 8 ) デーヴェンドラブッディにも同様の言明が見られる。「渴愛によって我執も含意されている。」(PVP 37a7 : sred pa'i sgo nas badg tu chags pa yang phangs pa nyidyin no //) シャーキャブッディはこれに次のような説明を加えている。「楽を獲得し苦を捨てたいという渴愛によって、我執も含意されている。それ (我執) なしには対象に対する渴愛はないからである。」(PVT 107a3-4 : bde ba dang sdug bsngal ba thob pa dang dor ba'i sred pa'i sgo nas bdag tu chags pa yang 'phangs pa yin te / de med par yul la sred pa med pa'i phyir ro //)
- 9 ) デーヴェンドラブッディはこの PV 81を以下のように説明している。「劣った場所に対する執着は苦を楽であると考えることを特質とするものであるから、苦に対する、すなわち母胎などの場所に対する、「これは楽である」

という転倒知と、これ(転倒知)を原因とする、苦を捨て楽を得たいという渴愛とが生まれる者の束縛の原因である。渴愛によって我執も含意されている。これはアーガマが説くところである。ある人には渴愛と転倒知がない。我執がないからである。原因がないのだから、彼には生の獲得はない。その時、輪廻から解脱することになる。」

(PVP37a6-b1 : gang gi phyr dman\* pa'i gnas la mngon par chags pa ni sdug bsngal la bde ba blo'i mtshan nyid can yin pa de ltar na / sdug bsngal te (P ; des D) mngal la sogpa'ignas la / phyin ci log blo dang / de ni bde ba yin no zhes bya ba de'i rgyu (P ; rgyun D) can te / sdug bsngal dang bde ba dor ba dang thob pa'i mtshan nyid can no // sred pa ni skye ba'i kun nas 'ching ba'i rgyu srid pa'i sgo nas bdag tu chags pa yang phangs pa nyid yin no // de ni lung gi don ston par byed pa yin te / srog chags gang gis (P ; srog chags gis lang D) yang sred pa dang phyin ci log pa blo med pa yin te / bdag tu mngon par zhen pa spang ba'i phyr ro // rgyu med pa'i phyr de'i skye ba mi 'thob bo // de'i tshe 'khor ba las grol bar 'gyur ro // 下線部は偈に対応する部分。また、点線部分は Vibh に類似した文がある。Vibh p. 40, fn. 2 : duhkhe garbhādisthāne 'bhiratiḥ sukham etad iti / )

また、プラジュニャーカラグプタは以下のように説明している。「したがって、転倒した知こそが、母胎という場所やそれ以外の場所に対して、それが苦であっても楽であると考えて、起こる。それ故、転倒した知と渴愛とによって生がある。一方、その両者が無い者は生を得ることはない。」(PVBh 89, 5-7 : tasmād viparyastamatir eva pravartate garbhassthāne 'nyatra vā duhkhe 'pi sukhasamjñāyā / tato viparyastamatitṛṣṇābhyām janma / yasya tu te na sto na sa janmādhigacchati / )

ダルマキールティはここ PV 80 81で再生をもたらすものとして、我執、苦を楽とみなす転倒知、本来は苦であるものに対する渴愛の三つをあげている。このうち、我執は転倒知の原因であり、その転倒知は渴愛の原因である。そして、後者二つが再生の直接的な原因とみなされている。輪廻という苦をもたらす原因については、ダルマキールティは PV 183a 185で集諦に関する説明の際に詳細に論じている。

- 10) 以下の PV 82 83でダルマキールティは、他世との往来が実際ありうるのかということの問題にするが、一部の注釈者はこれを中有身の問題と理解している。この部分については、最近では林 [1995]、護山 [2001] 等の研究がある。筆者も以前に取り上げたことがある。(稲見 [1987])

- 11) この想定反論部分について、注釈者達は次のように説明している。

デーヴェーンドラブディ「以下のように考えるかもしれない。「[来世に]行くことと[前世から]来ることは知覚されない。すなわち、生を結ぶものとしてみなされているこの衆生が、この[世]から来[世]に行くことは知覚されないし、前の場所(=前世)から母胎という場所に来ることも知覚されない。それ故、どうして、この[衆生]がある[場所]からやって来て母胎という場所をとるのか?これを推論式にすれば以下ようになる。【推論式45】【遍充】あるもの(X)が行くことと来ることが知覚されないなら、それ(X)はあるところから来てあるところに存在するのではない。例えば、行くことと来ることが知覚されない、石女の息子のように。【主題所属性】この有情が母胎などに行くことと来るとは知覚されない。【証因分類】これは能遍の非知覚(\*vyāpakānupalabdhi)であると考えられる。」と。(PVP 37a1-b4 : de ltar ni 'gyur mod kyi / gal te 'gro 'ong ma mthong na / sems can skye ba yongs su len par byed pa'i ngang tshul can du mngon par 'dod pa 'di'i 'di nas ma 'ongs par 'gro ba mi mthong ba dang / snga ma'i gnas las mngal gyi gnas su 'gro ba mi mthong ba de ltar na / ji ltar na 'di 'ga' zhig las 'ongs nas mngal gyi gnas yongs su len pa yin te / sbyor ba ni 'ga' zhig gi 'gro ba dang'ong ba mi mthong ba de ni 'ga' zhig las 'ongs nas 'ga' zhig tu gnas pa ma yin te / dper na 'gro ba dang 'ong ba ma mthong ba can gyi mo gsham gyi bu lta bu'o // srog chags 'di'i mngal la sogs par 'gro ba dang 'ong ba ma mthong ngo zhes bya ba ni khyab par byed pa mi dmigs pa yin par sems so // )

プラジュニャーカラグプタ「[反論]「そうすると、もし別の生に行くことと別の生から来ることがあるなら、その両者の知覚があることになる。しかし[実際には]そのような知覚はないのだから、両者は存在しないのである。」[これに対して]答える。」(PVBh 89, 15-16 : yadi tarhi gamanam āgamanam ca janmāntarāpekṣayā tata upalabdhis tayoh prāptā tathā ca nopalabdhir ity abhāva eva tayor ity āha / Cf. PVV (R) 334a7-b1. )

ミーマーンサー学派のクマーリラ・パッタは Ślokavārtika ātmavāda 59-64 において、仏教の中有の概念について取り上げ、これを批判している。このうち、v. 62においては、中有身の存在が認識手段がないことに基づいて否定されている。護山 [2001] は、このクマーリラの主張とダルマキールティのここでの議論を関連づけている。クマーリラは、ātmavāda 59-64 においては、主に、唯識学説を想定して、知(心)の移行はあり得ないということを論じている。ダルマキールティが想定している反論も、ただ移行が見えないというものであり、厳密には身体の移行に限定されない。むしろ、これまで見てきたように、ダルマキールティによっては心相続によって輪廻が説明されるの

で、この点ではクマーリラの主旨と符合する。当該のダルマキールティの議論は Ślokavārtika ātmavāda 59-64 の議論全体と関連づけられるかもしれない。

- 12) マノーラタナンディンはここ PV 82 83 で往来や非抵触が問題とされているものに対して「中有身」(antarābhavaśarīra)と言及している。ブラジュニャーカラグプタにも「中有身」という語が見える。ただし、後者の場合は、後に見るように、中有身の存在を必ずしも認めていたわけではない。中有については、周知のように、仏教内で古くからその存在に関して論争があった。部派においては、説一切有部等はその存在を認めたのに対し、大衆部等はそれの存在を否定したとされる。(平川[1974]上巻 pp. 232 233参照。)仏教以外では、類似した概念としては、サーンキヤ学派などによって「微細身」が認められている。しかし、同じサーンキヤ学派のヴィンディヤヴァーシンはこの存在を否定したとされている。(YD ad SK39. 参照。)また、ミーマンサー学派のクマーリラ・パッタは仏教徒の認める中有の存在を否定している。(Ślokavārtika ātmavāda 59-64. 生井[1996], 宇野[1996]参照。)

- 13) デーヴェンドラブッディは PV 82 の回答部分に対して以下のような説明を付している。「感官が鋭敏でないという理由から君には [ 来世に行くことと前世から来ることが ] 知覚されない。[ 問 ] 「例えば何と同じか？」[ 答 ] 弱視の人にはかすかな煙が見えないのと同じである。すなわち、眼に障害をもつ者には微細なほんの少しの煙は必ずしもとらえられないのと同様に、知覚される条件を備えてはいないものが知覚されなくても存在しないと成立することはないので、[ 先の推論式45は ] 不定であると [ この PV 82 の回答で ] 説かれているのである。また、もし、他の人々によっても知覚されない [ ということが先の推論式の証因の意味内容である ] というなら、そうすると、証因の意味内容は不成となる。[ なぜなら、 ] その場合、[ ヨーギンなどの ] ある者によっては必ず知覚されるはずである。ある者には知覚されない微細なものや匂いなどは、嗅覚の鋭いアリなどには知覚される。それ故、自分の知覚がないことだけでは [ 存在しないと ] 否定することはできないのだから、放棄すべきものではない。また、存在するものとして取り扱うことに関する推理は既に [ PV 41ab で ] 説かれた。」(PVP 37b47 : khyod kyis dbang po mi gsal ba'i rgyu'i phyir ma mthong ba yin no // ci dang 'dra bar zhe na / dper na mig mi gsal ba can gyi skyes bus du ba chung du mi dmigs bzhin / dper na mig nyams pa can gyis du ba cha phra ba nges par mi 'dzin pa de dang 'dra ba de ltar na 'dis ni spang bar bya ba dmigs pa'i mtshan nyid kyir gyur ba ma yin pa ma mthong du zin kyang / med par ma grub pa'i phyir ma nges par bstan pa yin no // ci ste gzhan dag gis kyang ma mthong ba de ltar na gtan tshigs kyi don de ni ma grub pa yin te / de ltar na 'ga' zhig gis mthong ba nyid du 'gyur ro // 'ga' zhig gis phra ba dang dri la sogs pa nye bar mtshon pa med pa 'am rnamsgrog sbur la sogs pa sna'i dbang po gsal ba can rnamsgyis dmigs pa de ltar na rang gi mthong ba ldog pa tsam gnod pa can ma yin pa'i phyir spang bar bya ba ma yin no // yod pa'i tha snyad la rjes su dpag pa yang bshad zin to // 下線部は偈に対応する部分。また、点線部分は Vibh に類似した文がある。Vibh p. 40, fn. 4 : kim ivety āha; upahatacakṣuṣaḥ )

また、ブラジュニャーカラグプタは以下のように説明する。「たとえ行くことと来ることが知覚されなくても、その両者が無いわけではない。感官が鋭敏でないから知覚されないのであって、存在しないから [ 知覚されないの ] ではない。なぜなら、必ずしも存在していないものだけが知覚されないのではない。弱視の者にはかすかな煙は認識対象にはならないが、[ そのかすかな煙は ] 存在しているのである。

なぜなら、離れていくにせよ、入ってくるにせよ、中有身は清浄 (svaccha) であるので知覚されない。知覚されないからといって存在しないわけではない。(512)

なぜなら、中有身は清浄なものとして業によって生じ、それはヨーギンだけに知られるものである。夢の中の身体のように知覚されないが、それだけでその [ 中有身は ] 存在しないとはいえないのである。」(PVBh 89, 19-23 : yady api gatyāgatī na dṛṣṭe tathāpi tayor nābhāvaḥ / indriyāṅgam ap ātavād adṛṣṭir na tv abhāvād eva / na hy avidyamānasyaivādarśanaṃ / mandanetrasya na tanudhū mo gativiśayas tathāpy asty eva /

antarābhavadeho hi svacchatvān nopalabhyate /

niṣkrāman praviśan vāpi nābhāvo 'nikṣaṇād api // 512 //

antarābhavadeho hi svacchatayā karmasāmarthyād utpanno yogimātragamyah / svapnaśarīra van nopalabhyate / na tāvatā tasyābhāvaḥ / )

シャーントラクシタにもこのダルマキールティの言明と類似した記述が見られる。「これはたとえ見えなくても、疑惑によって否定することはできない。これ(見えぬこと)は、弱視の人にはかすかな煙が見えないのと同じであろう。」(TS 1937 : na ca śakyaṇiṣedho 'sāv adṛṣṭāv api saṃśayāt / syād eṣā mandanetrasya svacchadhūmādyadrṣṭivat // ) これをカマラシーラは以下のように説明している。「そしてそれ(別の身体)はただ知覚されないことだけでは否定でき



ない。すなわち、ある特定の生における修習などがなくにより眼の弱い君にはその身体が存在していても見えないのである。かすかな煙が見えないのと同じである。したがって、単なる非知覚だけによって否定は成り立たないのである。すなわち、中有身は同類の者の清浄な神の目によっては見えるものであると述べられている。だからこそ、サーンキャが考える 微細身 (ativāhikaśarīra) も否定できない。以前の時にあった [ 身体 ] も空間的に離れているので知覚されないだろう。遠く離れた場所に生じているからである。また、ビシャーチャ等の身体のように、本質的に隔絶したものであるからである。また、[ 空間的・本質的に ] 隔絶していなくても、一般人には「これはあの人であって、鳥などになっている」と決定することはできないからである。不思議な力をもった薬を用いることによって変身した身体のように。」( TSP 662, 14-21 : na ca tasyādr̥stimātreṇa niṣedhaḥ śakyate kartum / tathā hy eṣā `dr̥stir jā-tiviśeṣe bhāvanādivaikalyān mandanetrasya bhavataḥ saty api tasmin dehe syād api / tanudhūmo\* `darśanavad iti nānupalabdhi-mātreṇa pratiśedhaḥ siddhyati / tathāhi sajātisuddhadivyākṣadr̥śyo `ntarābhavo\*\* varṇyate / ata eva sāṅkhyaparikalpitativāhika-sārīrasyāpy apratikṣepaḥ / pūrvakālabhavyāpi deśaviprākṣāṇ nopalambhaḥ syāt dūrataradeśotpatteḥ svabhāvaviprākṣād vā piśācādidehavat / aviprākṣe `py arvāgdarśinā so `yaṃ prāṇī pataṅgādyātmatāṃ gata iti niścetum aśakyatvāt / acintyaśaktibhaiṣa-jyopayogena parāvṛttadehavat / )

中有身が見えないことについてはアビダルマにおいても説明がある。AKBh 124, 27-125, 1 : samānajātyair avāntarābhavikair dr̥syate / yeṣāṃ ca divyaṃ cakṣuḥ suvisuddham abhijñamayam te enam paśyati / upapatticakṣuṣā tu na dr̥syate / atyarthamacchatvāt / ; 『大毘婆沙論』 362a10 11 : 不可見亦不可觸。以中有身極微細故。『チャラカ・サンヒター』にも同様の記述がある。CS IV-2-31cd : . . . na tu tasya dr̥śyaṃ divyaṃ vinā darśanam asti rūpam /

- 14) デーヴェンドラブッディはここで以下のような反論を想定している。「こう考えるかもしれない。すなわち、「形態をもつものとして生じている衆生に対して、身体という形をもつものがどうして抵触しないことがある。[ これを推論式にすれば以下ようになる。推論式46 ] 【遍充】 あるもの ( X ) とあるもの ( Y ) とが形態をもつものと承認されるなら、その [ 一方 ] ( X ) は形態をもつ他方 ( Y ) に対して抵触があるものと認められるべきである。例えば、布と瓶のように。【主題所属性】 君たち ( 仏教徒 ) には、前 [ 世 ] の身体も形態をもつと認められている。【証因分類】 これは 本質という証因 であると考えられる。」と。」( PVP 37b7-38a2 : de ltar ni `gyur na / srog chags lus dang ldan par `jug pa la ( P omits la ) lus kyī mnam pa dang ldan pa i ltar na sgrib par byed pa ma yin no // sbyor ba ni gang dang gang lus dang ldan pa nyid du khas len pa de ni lus gzhan lasgrib par byed pa nyid du `dod par bya ste / dper na snam bu dang bum pa lta bu `o // khyod kyis sngar gyi lus kyang lus can nyid du `dod pa yin no zhes bya ba ni rang bzhin gyi gtan tshigs yin par sems so // ) また、ラヴィグブタの想定する反論は以下のとおり。「[ 反論 ] 「中有身は形態をもつものであるから、壁などの様々なものに分断されてどうして進行することができるのか？ 壁などに分断されて現在の身体 [ が進行できない ] ように。」これに答える。」( PVV ( R ) 335a6 : bar mdo `i srid pa `i lus gzugs can yin pa `i phyir / ji ltar rsig pa la sogs pa sna tshogs kyis chod pa la `gro bar `gyur te / rtsig pa la sogs pas chod pas da lta ba `i lus bzhin no zhe na / `dir smras pa / . . . )
- 15) PV 83b は PVK , , M , K には kiñcit kvacid aśaktimat とあるが、kiñcit kvacid aśaktimat と読む。諸資料には以下のようにある。

1 . 偈の校訂出版テキスト

aśaktimat PVK ( II, III, PS, VB, M, K )

asaktimat PVK ( I )

2 . 偈のチベット語訳

thogs med PVKt, PVKt ( P )

thogs can min PVKt ( D )

thogs bcas min PVKt ( R )

3 . 注釈

マノーラタナンディン

. . . `śaktimad apratighātavat . . . PVV ( M1, M2 )

. . . `saktimad apratighātavat . . . PVV ( M ) ms

ブラジュニャーカラグブタ

svapnaśarīravat evāśaktimad . . . kvacid aśaktimad . . . PVBh, PVBhms

rmi lam gyi lus bzhin du thogs pa med pa . . . la lar thogs pa med PVBht

以上のように、チベット語訳では総じて「抵触がない」と訳されており、これは *aśaktimat* の訳ではなく、*asaktimat* の訳とみなすべきである。また、マノーラタナンディンの *apratighāvatav* という言い換えもこれを指示する。また、サンスクリット資料は *aśaktimat* の形を支持するものが多いが、*asaktimat* という形を伝えるものもある。さらに、文脈上、*aśaktimat* より *asaktimat* の方が意味をなす。s と ś は写本表記上交代可能であるということも考慮に入れるべきかもしれない。（PVV (M1) の *Sāṅkrtyāyana* の序文参照。）

- 16) PVV (M1) (M2)ともに *'saktimad* とあるが、PVV (M) ms により *'saktimad* に訂正して読む。
- 17) PVV (M1) (M2)ともに *aśaktimad* とあるが、PVV (M) ms により *asaktimad* に訂正して読む。
- 18) PVV (M1) (M2)ともに *nādr̥stēnāsād eva* とあるが、PVV (M) ms により *nādr̥stēr asād eva* に訂正して読む。
- 19) このマノーラタナンディンの理解は以下のデーヴェンドラブッディのものと同じである。「ここにおける、この証因は不定 [ 因 ] である。すなわち、ある実体は形態をもつものであっても、微細であるという理由から、形態をもった別のあるものに対して抵触がないと知られる。[ 問 ] 「例えば何と同じか？」[ 答 ] 水のように。[ すなわち、] 形態をもつものである瓶などに対して、水は形態をもつものであっても入り込む（しみ込む）のである。[ また、] 金と水銀のように。[ すなわち、] 水銀は形態をもつものであっても金に入り込むように。[ また、] 太陽光線も水晶を通して薪に入り込む。したがって、[ 先の推論式の証因は ] 不定 [ 因 ] である。知覚されないからといって存在しないわけではない。その場合、知覚されない、すなわち、見られないことだけから絶対存在しないとはいえないのだから、放棄すべきではない。」（PVP 38a2-4: 'dir gtan tshigs 'dis ni ma nges pa yin no // de ltar na rdzas 'ga' lus can dag yin yang / sraḥ pa nyid de dang ba nyid kyi rgyu'iphyir / gzugs can gzhan la lar thogs can min par mthong ngo // ci dang 'dra bar zhe na / chu bzhin te bum pa la sogs pa lus can la chu lus can yin du zin kyang 'dzag pa nyid yin no // gser dang dngul chu bzhin / dngul chu lus can yin du zin kyang gser gyi rjes su 'jug pa lta bu'o // nyi ma'i zer gyis kyang shel phigs nas shing la 'jug par byed pa de ltar na ma nges pa yin no / ma mthong phyir yang med nyid min // de ltar ma mthong ba zhes bya ba mi snang ba tsam las kyang med pa nyid du 'gyur ba ma yin pa de ltar na spang bar bya ba ma yin no // 下線部は偈に対応する部分。点線部分は Vibh に類似した文がある。Vibh p. 41, fn.2: sūryaśmayaś ca sphaṭikambhitvendhanaṃ viśantītya anekāntaḥ / )

一方、プラジュニャーカラグプタはこの PV 83 に対し、これとは別の読み方を提示する。「夢の中の身体と全く同様に、[ 中有身は ] 形態をもたないので抵触がない。一方、形態をもつものであってもあるものはあるものに対して抵触がない。瓶などに対する水、水晶などに対する光線、金に対する水銀、のように。あるいはむしろ、金における水銀のように、壺における水のように、存在しているものが知覚されないのではなく、知覚されないのだから、中有身はむしろ全く存在しないのである。」（PVBh 89, 27-29: svapnaśarīravād evāśaktimad\* amūrtatvāt / mūrtam apī tu kiṃcīt kvacid aśaktimaj\*\* jalavad ghaṭāḍau prabhāvāt sphuṭikāḍau hemni sūtavat / atha vā jalavad sūtavād hemni na vidyamānam eva nopalabhyate / apī tv adr̥stēr asād eva vāntarābhavaśarīram / \*evāśaktimad\*\* aśaktimaj とあるのを Tib によって訂正。下線部は PV 83 の語に対応する部分。）同様の読みはラヴィグプタにも見られる。「中有身は微細、すなわち、清浄であるから、家などというあるものに対して抵触がない。壺などに対する水や、水晶などに対する光線や、金に対して水銀が入り込むことのように。あるいはむしろ、水のように、金における水銀のように、存在しないのではないか。中有身は知覚されないので、むしろ、存在しないのである。」（PVV (R) 335a7-b1: bar mdo'i srid pa'i lus phra ba ste / dang ba'i phyir khyim la sogs pa la lar thogs pa med de / dper na bum pa la sogs pa la chu bzhin dang / shel la sogs pa'i mdangs bzhin dang / gser la dngul chu 'jug pa bzhin no // yang na chu bzhin dang / gser la dngul chu bzhin yod pa ma yin pa nyid ma yin nam / yang srid pa bar mdo'i lus ma mthong bas med pa nyid de / . . . )

護山 [ 2001 ] pp. 26-29 の理解によれば、プラジュニャーカラグプタはここで PV 83 全体に対し二通りの解釈を提示しているとされるが、この理解には若干の疑問が残る。プラジュニャーカラグプタは83を引用した直後に述べる散文においては、その第一解釈の提示とされる部分では83d に、また第二解釈の提示とされる部分では83ab に言及していないからである。二通りの読みが提示されるのは83c 句に対してのみである。確かに82の下の解説において「知覚されないからといって存在しないとはいえない」という説明が見られ、これは83d の第一解釈とも考えられるが、これはむしろ82の内容から導き出された結論とみなしうる。プラジュニャーカラグプタは83d 末尾の vā を atha vā の意味ととり、83d 句から、或いは83c 句からダルマキールティが別の見解を提示していると解釈しているのであって、この部分には別の解釈は提示していないのではないだろうか。すなわち、「中有身は知覚されないからといって存在しないとはいえない」ということは既に直前の82で説かれ、83a b (或いは83a c) では「抵触がないこと」が述べられ、最後に83c d (或いは83d) で「知覚されないので中有身は存在しない」という別の理解が述べられている、と

ラジュニャーカラグプタは理解しているように筆者にはみえる。問題となるのは83cの水と水銀の例を前の83abの「抵触がない」につなげて読むか、後の83dの「知覚されないから存在しない」につなげて読むかである。これに関して二つの解釈を提示しているともとれるし、両方につなげて二度読むというのが彼の解釈かもしれない。さらに、後の83dにつなげる場合、この例は「存在するが知覚されないもの」という逆の例と理解するよりも、むしろ「知覚されないので存在しないもの」という同類例と理解すべきかもしれない。今、このようなラジュニャーカラグプタの理解にもとづいたPV 83の暫定的な翻訳を示せば以下になるろう。「[中有身は]微細であるので(=形態をもたないので)抵触がない。しかし一方、形態をもつものであってもあるものはあるものに対して抵触がない。[壺に対する]水のように。金に対する水銀のように。あるいはむしろ、[壺における]水のように、金における水銀のように、[存在しているが知覚されないのでは]なく、知覚されないから全く存在しないのである。」

このようなラジュニャーカラグプタのPV 82-83に対する理解は以下の彼のまとめからも明らかであろう。「したがって、夢における行き来は他人には見られないが、それらは存在する。だから、それらが見えないことは[それらが存在しないことに対して]不定である。したがって、[他世との]往来は存在しないわけではない。あるいはむしろ、[他世との往来は]全く存在しない。このことが[以上のPV 82-83で]説かれたのである。」(PVBh 91, 14-15: *tasmāt svapnaviṣaye gatyāgatī na dr̥ṣṭe anyena tathāpi te eva ity anaikāntikatā tadadarśanasya / tasmān na gatyāgatyor abhāvo 'tha vābhava eveti pratipāditam/*)

PV 83に対するラジュニャーカラのような読み方は不可能ではないと思われるが、d句のnaは後ろにかけて「知覚されないからといって存在しないわけではない」と読むデーヴェンドラブッディやマノーラタナンディンの読みの方が自然のように見える。「知覚されないからといって存在しないわけではない」ということはダルマキールティの作品中において何度も説かれる、彼の基本的立場でもある。

なお、微細で抵触がないことは中有身の性質としてアビダルマでも説かれるものである。AKBh 125, 10-11: *apratighavān / pratighātaḥ pratighaḥ / so 'syāstīti pratighavān / na pratighavān apratighavān / vajrādibhir apy anivāryatvāt /*『大毘婆沙論』362a14-15: 答中有色身微細無礙。

- 20) デーヴェンドラブッディはこのPV 84の導入部で以下のように述べる。「さらに、身体が心の質料因であると認められるなら、その[身体]は単一のものであるか、多数のものであるかであろうが、まず、単一なものではない。[問]「それはどうかか。」[答]」(PVP 38a4-5: *gzhan yang lus sems kyi nye bar len par 'dod pa gang yin pa de ni gcig gam du mar 'gyur grang na / re zhig gcig ma yin no // de 'i phyir zhe na / . . .*)
- 21) PVV (M2): -rūpaḥ とあるが、PVV (M1) = PVV(M) ms : -rūpaḥ で読む。
- 22) デーヴェンドラブッディは以下のように説明している。「手などが揺れれば全部の身体も揺れることになってしまうからである。[部分と全体は]違いがないのだから。その単一なものに揺れる・揺れない[という相矛盾する運動]は妥当しない。単一であることがなくなるからである。」(PVP38a5: *lag sogs g.yo na thams cad dag / lus kyang g.yo ba thob phyir te / tha dad pa med pa'i phyir ro // de 'i gcig g.yo ba dang mi g.yo ba mi rigs te / gcig pa nyid nyams pa'i phyir ro //*)

ここPV 84から85abまで(マノーラタナンディンの理解による。デーヴェンドラブッディなどによれば85aまで)、ダルマキールティはニャーヤ・ヴァイシェーシカ学派において説かれる全体(avayavin)について批判する。ニャーヤ・ヴァイシェーシカ学派は多数の部分とは別に単一な全体が存在すると認めている。これに対し、仏教はこれを認めない。(ニャーヤ・ヴァイシェーシカ学派の全体説、および、仏教徒との議論の変遷等については、Shastri [1964], 山上 [1968][1976](山上 [1999]に再録), 船山 [1990]等を参照されたい。)周知のように、ダルマキールティは『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第1章においても、全体批判を行っている。そこでこの議論はここPVの議論と類似した内容を含むので、以下に試訳を提示する。「粗大な単一な対象がそのように顕現することもない。手などが揺れれば[身体]全部が揺れることになってしまうからである。また、[身体全部は]揺れないというのなら、揺れている[手]と揺れていない[身体]は別個なものとして成立することになる。布と水のように。また、一部が覆われれば全部が覆われることになる。[全体は単一であるので]違いはないのだから。また、[全体は]どこかが覆われることはないのだから、欠けることなく[全部が]見えることになる。[反論]「部分は覆われるが全体は覆われない。」[答]半分覆われても、[全体は]覆われていないのだから、[覆われる]前と同様にこれ(全体)が見えることになる。[反論]「部分を介してそれ(全体)は見られるのであるから、見えていない部分は知られないのである。」[答]ちがう。[全体には]違いがないので、[覆われた部分と結びついたものと

しても、覆われない部分と結びついたものとしても]いかようにも[全体は]知られないことになるから。また、すべての部分が同時に見られることはありえないので、いつになってもこれ(全体)は見えないことになる。また、ある程度の部分が知られれば[全体が]見えるというなら、ほんの僅かな部分が見られても[覆われていない時と]同様に粗大な[全体]が見えることになる。さらに、一部が赤く染められれば、全部が赤く染められることになる。[一部は赤く染められないなら、全部が]赤くないものと知られることになる。部分(一部)は赤くても全体としては赤くないのだから、赤くて赤くないものが見られることになる。」(PVin I 84, 18-86, 9: yul rags pa gcig de ltar snang ba yang ma yin te / lag pa la sogs pa gcig g.yo na thams cad gyo bar 'gyur ro // mi g.yo na yang g.yo ba dang mi g.yo ba dag so sor grub par thal bar 'gyur te / ras dang chu bzhin no // gcig bsgrigs na yang thams cad bsgrigs par thal te / tha dad med pa'i phyir ro // yang na ni 'ga' yang ma bsgrigs pa'i phyir ma tshang ba med par mthong bar 'gyur ro // yan lag bsgrigs kyi yan lag can ni ma yin no zhe na / phyed bsgrigs kyang ma bsgrigs pa'i phyir 'di nga ma kho na bzhin du mthong bar thal lo // yan lag gi sgo nas de mthong ba'i phyir yan lag ma mthong ba la de rtogs par mi 'gyur ro zhe na / ma yin te / tha dad pa med pas rnam pa thams cad du mi rtogs par thal ba'i phyir ro // yan lag thams cad kyang cig car mthong bar mi nus pa'i phyir thams cad kyi tshe 'di mi mthong bar thal lo // yan lag cung zad <mthong ba na yang> mthong ba yin na ni yan lag cung zad gcig mthong ba nas yang de bzhin du rags pa mthong bar 'gyur ro // gcig kha bsgyur na yang thams cad kha bsgyur ba 'am ma bsgyur bar rtogs par 'gyur ro // yan lag kha bsgyur na yang yan lag can kha ma bsgyur ba'i phyir / bsgyur ba dang ma bsgyur bar snang bar 'gyur ro // この部分は Steinkellner [1972] により, NBhū 104, 8-16 にパラレルなサンスクリット・テキストが発見されている。(この PVin は 船山 [1990] p 617, 戸崎 [1992] pp 4 7 に, 対応する NBhū は 山上 [1999] pp. 159 160 に訳出されている。)

以下にも見るように、ダルマキールティは当該 PV とこの PVin で、振動、覆い、赤色、という三つの例を用いて 全体 が存在しないことを指摘するが、このような方法はダルマキールティ以前には見られないものである。このダルマキールティの批判方法は後代の仏教徒にも受け継がれる。例えば、シャーンタラクシタは TS dravyaparīkṣā において以下のように述べている。「粗大なものが単一であることを本性とするなら、ただ八チの足だけで[一部が]覆われれば、全部が覆われることになる。[全体は単一であるので]違いはないのだから。また、一部が赤く染められれば全体が赤く染められることになる。また、相矛盾した属性が存在するなら、[単一ではなく]多であることになる。」(TS 592-593: sthūlasyaikasvabhāvatve makṣikāpadamātrataḥ / pīdhāne pīhitam sarvam āsajyetāvibhāgataḥ // 592 // rakte ca bhāga ekasmin sarvaṃprajyeta raktavat / viruddhadharmabhāve vā nānātvam anuśajyate // 593 //) これに対して、カマラシーラは以下の説明を付している。「もし、粗大なものが単一なものであろうなら、一部が覆われれば全部が覆われ、一部が赤ければ全部が赤くなることになってしまう。覆われている部分と覆われていない部分は、また、赤い部分と赤くない部分は君の説によれば[全体は単一なので]異なるからである。また、単一なものには相矛盾する属性が結びつくことはありえない。過大適用となるから。また、同様に、全世界は単一の実体となろう。そして、それゆえ、同時に生じることになる、などという困った帰結になる。しかし、[実際には]一部が覆われても全部が覆われることは見られないので、これは知覚との矛盾がある。同様に、推理との矛盾もある。すなわち、【遍充】相矛盾した属性が存在しているもの、それは単一なものではない。牛とバッファローのように。【主題所属性】粗大なものも、覆われるなどのあり方で知覚され・知覚されないという相矛盾する属性が存在しているものである。これは 能遍と矛盾したものの知覚 である。すべてが単一のものとなってしまうというのが[この逆を] 否定する認識手段 である。」(TSP 246, 13-21: yadi hi sthūlam ekaṃ syāt tadaikadeśapīdhāne sarvasya pīdhānam, ekadeśarāge ca sarvasya rāgaḥ prasajyeta, pīhitāpīhitayor aktāraktayor ca bhavanmatenābhedāt / na caikasya parasparaviruddhadharmādhyāso yuktaḥ, atiprasaṅgāt / evaṃ hi viśvam ekaṃ dravyaṃ syāt, tatas ca sahotpādādīprasāṅgaḥ / na caikadeśapīdhāne sarvaṃ pīhitam īkṣyata iti pratyakṣāvirodhaḥ / tathānumānavirodho 'pi / tathāhi-yat parasparaviruddhadharmādhyāsitam na tad ekaṃ bhavati, yathāg omahiṣam, upalabhyamānānupalabhyamānarūpaṃ pīhitādirūpeṇa ca viruddhadharmādhyāsitam sthūlam iti vyāpakaviruddhopalabdhiḥ / sarvasyaikatvaprasāṅgo bādhakaṃ pram āṅam /) また、ニヤーヤ・ヴァイシエーションカ学派を中心に他学派でも取り上げられることになる (NBhū 104, 8ff; NVTṬ 473, 23ff; ŚVK ad ŚV sūnyavāda 20; NKand 119, 10ff; TUP 95, 24ff 等々)。

- 23) デーヴェンドラブッディ「矛盾する運動は単一のものにはありえないのだから。[この句は、]単一なものには矛盾する運動はありえない、という意味である。[君の説によれば、身体は単一であるので、]例えば、左右の両手が別々の方向に動くことは正しくない。右手が南の方に動けば、左[手]も同様に[南の方に動くことに]なる。という意味である。しかし、そのようなことは[実際には]ない。別個に動くのだから、[身体が]単一であること

は妥当しないのである。」(PVP 38a7-b2: 'gal ba can gyi las ni gcig la mi rung phyir gcig la 'gal ba las ni mi rigs so zhes bya ba'i don to // dper na g.yas dang g.yon gyi lag pa gnyis po dag ni yul tha dad par 'gro bar rung ba ma yin pa lta bu ste // lag pa g.yas pa lho phyogs su 'gro ba na / g.yon pa yang de bzhin du 'gyur ro zhes bya ba'i don to // de ltar yang ma yin te gang gi phyir tha dad par 'gro ba de'i phyir gcig nyid yin par mi rigs so //)

- 24) PVV (M2): (tathā ca) sarvasya とあるが, PVV (M1) = PVV (M) ms : sarvasya で読む。
- 25) PVV (M1) (M2)ともに kampo 'stīti とあるが, PVV (M) ms により kampa iti に訂正して読む。
- 26) PVV (M1) (M2)ともに ābhāva-とあるが, PVV (M) ms により ābhāvaḥ に訂正して読む。
- 27) デーヴェーンドラブッディはこの帰謬と帰謬還元について具体的に推論式を提示する。「推論式は以下のようになる。[推論式47]【遍充】あるもの(X)があるもの(Y)と異なるなら,それ(X)はそれ(Y)が揺れば揺れる。例えば,[揺れている部分]そのものように。【主題所属性】足なども手とは本質的に異なる。これは本質という証因 (svabhāvahetu) である。しかし,[実際には]このようなことはない。[したがって,]この[推論]の逆(viparyaya)は以下のようになる。[推論式48]【遍充】あるもの(X)があるもの(Y)が揺れても揺れないなら,それ(X)はそれ(Y)と異なることはない。例えば,デーヴァダッタが進行するとき,ヤジュニヤダッタは止まっているように。【主題所属性】足なども,手が揺れても揺れるわけではない。これは能遍の非知覚 (vyāpakānupalabdhi) である。」(PVP 38a5-7: sbyor ba ni gang zhig gang las tha dad pa med pa de ni de (P; de ni D) g. yo ba na g. yo ba yin te dper na rang gi ngo bo nyid lta bu'o // rkang la sogs pa yang lag pa dang tha dad pa med pa'i bdag nyid can yin no zhes bya bani rang bzhin gyi gtan tshigs so // de ltar yang ma yin te / de las bzlog pa ni gang zhig gang g.yo ba na mi g.yo ba de ni de las tha mi dad pa ma yin te / dper na lha sbyin 'gro ba na mchod sbyin 'dug pa lta bu'o // rkang pa la sogs pa yang lag pa g.yo ba na mi g.yo ba zhes bya ba ni khyab (P; khyad D) par byed pa mi dmigs so //) 帰謬と帰謬還元については, Kajiyama [1999] の Introduction 等参照。
- 28) デーヴェーンドラブッディは以下のような反論を想定する。「こう考えるかもしれない。すなわち,「部分は揺れるが,全体は[揺れ]ない。したがって,[先に仏教徒が提示した]帰謬(推論式47)の証因は不成[因](asiddha)であり,[帰謬]還元(推論式48)はわかりきったことの論証(siddhasādhana)である」と。」(PVP 38b2-3: de ltar ni 'gyur na / yan lag g.yo ba yin gyi yan lag can ma yin pa de ltar na / thal ba'i gtan tshigs ma grub cing bzlog pa ni grub pala sgrub pa yin no zhe na /)
- 29) 布と水の例は PVin にも見える。注22) 参照。Vibh にはこの例の説明とおぼしき文章がある。「例えば,一部についた水は布の一部だけに見られる。それと同様である。」(Vibh p. 41, fn. 5: yathā ekadesalagnam udakaṃ vastraikeśa eva dr̥ṣyate tadvat /) PVin の注釈家は以下のように説明している。ダルモータラ「ろ過布 という,[組んだ]三本の木にかけられた布は動かないが,水は動く。それ故,[布と水は]別のものである。同様に,今の場合も別のものとみなすべきである。」(PVinT (Dh) 144a2: dper na chu tshags zhes bya ba'i ngas dbyi gu gsum la dpyangs pa mi g.yo la chu ni g.yo ba des na tha dad pa de bzhin du 'dir yang tha dad par blta bar bya'o //) ジュニャーナシュリーバドラ「洗濯屋の棒に広げられた布を水で洗う時,布はとどまっているが,水はとどまらずに落ちるのと同様である。(?)」(PVinT (Jñ) 197b3: gos khru mkhan gyi dbyug pa las brgyang ba las chus khru ba na gos ni gnas la chu ni mi gnas par 'dzag pa bzhin no //)
- 30) PVV (M2): (tathā ca) pr̥thaksiddhiḥ とあるが, PVV (M1) = PVV (M) ms : pr̥thaksiddhiḥ で読む。
- 31) デーヴェーンドラブッディ「そうでないなら,別個のものとなる。そうすると,部分と全体は別個のものとなる。これを推論式で示せば以下のようになる。[推論式49]【遍充】あるもの(X)があるもの(Y)が揺れても揺れないなら,それ(X)はそれ(Y)とは別のものとなる。例えば,水は揺れても腕は揺れないように。【主題所属性】手をもつもの(身体)も手が揺れても揺れない。これは本質という証因 である。[また,]まさにこの[推論]の逆(還元)は以下のようになる。[推論式50]【遍充】あるもの(X)があるもの(Y)と内属する場所が異なるものでないなら,それ(X)はそれ(Y)が揺れば揺れないことはない。例えば,[揺れている]手そのものように。【主題所属性】身体も手とは内属する場所が異なるものでない。これは能遍の非知覚 である。」(PVP 38b2-5: gzhan du tha dad grub par 'gyur / de ltar nayan lag dang yan lag can tha dad pa nyid du 'gyur ro // sbyor ba ni gang zhig gang g.yo ba na (P; ni D) bdag nyid mi g.yo ba de ni de las tha dad par 'gyur te / dper na chu g.yo ba na snod mi g.yo ba lta bu'o // yan lag can yang yan lag mams g.yo ba na mi g.yo ba yin no zhes bya ba ni rang bzhin gyi gtan tshigs so // 'di nyid bzlog pa ni gang zhig gang las ldan pa can gyi yul tha dad pa can ma yin pa de ni de g.yo ba na yang mi g.yo ba yod pa ma yin te / dper na lag pa

de nyid kyi rang gi ngo bo lta bu'o // lus kyang lag pa las ldan pa can gyi yul tha dad pa can ma yin no zhes bya ba ni khyab par byed pa mi dmigs pa'o // Cf. Vibh p.41, fn.6 : pṛtagbhāvaḥ syād avayavāvayavinoḥ / avayavī bhedenā dṛṣyeta / この84d では、ダルマキールティは部分は揺れても全体は揺れないなら、部分と全体は完全に独立したものとなり、部分に全体は内属するというニャーヤ・ヴァイシェーシカ説が崩れることを説いているものと思われる。ニャーヤ・ヴァイシェーシカにおいては、全体は部分に内属し、内属したものは分離できないものとして成立したもの（ayutasiddha）であって、pṛthaksiddhi ということはない。

- 32) PVV (M2) : prasaṅgaviparyayau (bauddhavyau)とあるが、PVV(M1) = PVV (M) Mms : prasaṅgaviparyayau で読む。
- 33) デーヴェンドラブッディ「一部が覆われればのこり全部が覆われることになる。[部分と全体とは] 違いがないからである。これを推論式にすれば以下のようなになる。[推論式51]【遍充】あるもの(X)があるもの(Y)に他ならないなら、それ(X)はそれ(Y)が覆われれば覆われる。例えば、その[覆われている部分]そのもののように。【主題所属性】覆われていない[箇所]も覆われている[箇所]に他ならない。これは 本質という証因 である。しかし、[実際には]覆われないので、[部分と全体は同じものではなく、]別のものである。[したがって、この推論の]逆[の推論式]は以下のようなになる。[推論式52]【遍充】あるもの(X)があるもの(Y)が覆われるとき覆われないなら、それ(X)はそれ(Y)そのものではない。例えば、牛が覆われるとき馬は覆われないように。【主題所属性】足も手が覆われているとき覆われない。これは 能遍の非知覚 である。」(PVP 38b5-7 : gcig bsgribs pa na ste phyogs gcig bsgribs pa na / lhag ma thams cad dag bsgribs par 'gyur te tha dad pa med pa'i phyir ro // sbyor ba ni gang zig gang kho na yin pa de ni de bsgribs pa (P ; pas D) na bsgribs pa ste / dper na de nyid kyi rang gi ngo bo lta bu'o // ma bsgribs pa yang bsgribs pa nyid yin no zhes bya ba ni rang bzhin gyi gtan tshigs so // bsgribs pa yang ma yin pa de bas na tha dad pa yin no // bzlog pa ni gang zhig gang bsgribs pa na ma bsgribs pa de ni de nyid ma yin te / dper na ba lang bsgribs pa na rta ma bsgribs pa lta bu'o // rkang pa yang lag pa bsgribs pa na ma bsgribs pa yin no zhes bya ba ni khyab par byed pa mi dmigs pa'o //)
- 34) デーヴェンドラブッディ「こう考えるかもしれない。すなわち、「部分<sup>が</sup>覆われても全体は違う」と。もしそうなら、覆われないなら、[覆われる]以前にそれが見られたのと同じように、一部が覆われたとしても[全く覆われていないものとして]見られることになる。これを推論式にすれば以下のようなになる。[推論式53]【遍充】あるもの(X)がその原因総体を妨害するものがないなら、それ(X)の生起がある。例えば、原因総体を妨害するものがないような芽のように。【主題所属性】[全体を部分とは全く別のものであるので、]全体を対象とする知にもその原因総体を妨害するものがない。(つまり、全部がみえるはずである。)これは 本質という証因 である。[反論]「部分を把握する手段が知られているようなものは、覆われれば見えることはないのだから、[この推論式53の証因は]不成[因]である」[答]ちがう。すべての部分を見ることはありえないので、内属因が見られなくても、それ(全体)は見えると[君達に]認められているのだから。」(PVP 38b7-39a3 : de ltar ni 'gyur mod kyi yan lag bsgribs pa na yan lag can ma yin no zhe na / de'i tshes ma bzgribs na ji ltar sngar de mthong ba de ltar phyogs gcig bsgribs su zin kyang mthong bar 'gyur ro // sbyor ba ni gang dang gang rgyu tshogs pa gags byed pa med pa can yin pa de'i skye ba yod pa yin te / dper na rgyu tshogs pa gags byed pamed pa can gyi myu gu la sogs pa lta bu'o // yan lag can gyi yul can gyi mthong ba la yang rgyu tshogs pa gags byed pa med pa can yod do zhes bya ba ni rang bzhin gyi gtan tshigs so // gal te gang gi (corr. ; rang gi D, gang gis P) yan lag 'dzin pa'i thabs mthong ba can de la bsgribs pa na mthong ba med pa'i phyir ma grub pa yin no zhe na / ma yin te yan lag thams cad (P ; can D) mthong ba mi srid pas na / 'phrod pa 'du ba mthong ba med pa can de nyid mthong bar khas len pa'i phyir ro //) ここで、ダルマキールティが意図していることは、「部分<sup>が</sup>覆われても全体は覆われないとすれば、たとえ一部が覆われても全部余すところなく見えることになる」ということと思われる。
- 35) デーヴェンドラブッディ「さらに、一部が赤く染められれば、全部が赤くなることになってしまおう。それ(全体)には、ある部分は赤く、ある部分は赤くないというような違いはないのだから。これを推論式で示せば以下のようなになる。[推論式54]【遍充】あるもの(X)があるもの(Y)に他ならないなら、それ(X)はそれ(Y)が赤く染められれば赤くなる。例えば、赤く染められた[部分]そのもののように。【主題所属性】赤く染められていない[箇所]も赤い[箇所]に他ならない。これは 本質という証因 である。しかし、[実際には]赤くはない。[したがって、この推論の]逆[の推論式]は以下のようなになる。[推論式55]【遍充】あるもの(X)があるもの(Y)が赤く染められるとき赤くならないなら、それ(X)はそれ(Y)とは別のものである。例えば、毛布が赤く染められるとき布は赤くならないように。【主題所属性】一部分が赤く染められるとき[それとは別の]第二の部分も赤くならない。これは 能遍の非知覚 である。」(PVP 39a3-5 : gzhan yang phyogs gcig tshon gyis bsgyur ba na phyogs

thams cad bsgyur ba thob par 'gyur ro // de la tha dad pa yod pa ni ma yin na / gang gis na cung zhig bsgyur ba dang cung zhig ma yin / sbyor ba ni gang zhig gang kho na yin pa (P ; pas D) de ni de sbyur ba na bsgyur ba nyid yin te / dper na mtshon gyis bsgyur ba'i rang gi ngo bo lta bu'o // ma bsgyur ba yang bsgyur ba nyid yin no zhes bya ba ni rang bzhin gyi (D ; gyis P) gtan tshigs so // bsgyur ba yang ma yin pa de bas na bzlog pa ni gang zhig gang bsgyur ba na ma bsgyur ba de ni de las tha dad pa yin te (D ; na P) dper na la ba bsgyur ba na snam bu ma bsgyur ba lta bu'o // phyogs gnyis pa yang phyogs gcig bsgyur ba na bsgyur ba ma yin no zhes bya ba ni khyab par byed pa mi dmigs pa'o // )

36) PVV (M1) (M2)ともに vā 'gatiḥ syāt とあるが、PVV (M) ms により vā gatiḥ syāt に訂正して読む。

37) デーヴェーンドラブッディ「さらに、赤く染められたものが知られないことになる(?赤く染められないものが知られることになる)。赤い部分が赤くない部分と同様に[赤くないものとして]見られることになる。これを推論式で示せば以下のようなになる。[推論式56]【遍充】あるもの(X)があるもの(Y)に他ならないなら、それ(X)はそれ(Y)が赤く染められないなら赤くない。例えば、赤く染められない[部分]そのもののように。【主題所属性】赤く染められたとみなされる[箇所]も赤くない[箇所]に他ならない。これは 本質という証因 である。」(PVP 39a5-7 : gzhan yang bsgyur ba mi rtogs 'gyur / bsgyur ba'i phyogs dang ma bsgyur ba'i phyogs dang 'dra bar mthong bar 'gyur te tha dad pa med pa'i phyr ro // sbyor ba ni gang zhig gang kho na yin pa de ni de ma bsgyur ba na ma bsgyur ba yin te / dper na ma bsgyur ba'i rang gi ngo bo lta bu'o // bsgyur bar mngon par 'dod pa yang ma bsgyur ba kho na yin no zhes bya ba ni rang bzhin gyi gtan tshigs so // )

プラジュニャーカラグプタは以上の PV 84 85 に対して以下のような説明を付している。「全体という実体は運動をもち、属性をもち、結合などの原因であり、内属因である。それにもし、運動があるなら、それは内属因であるので、全部が揺れるということになる。[反論]「全体は揺れかつ揺れないものという多様なものである。」[答]揺れ[そして揺れない]などという本性をもったデーヴァダッタとヤジュニャダッタという[二人の]ものも単一の全体であるということになる。[反論]「単一であることと揺れかつ揺れないものであることが実際に経験される。したがって、いかなる矛盾があろう。」[答]この、単一であることとは何か?もし、顕現に差異がないこと(pratibhāsābheda)であるなら、それは存在しない。単一の結果をもつこと(ekakāryatā)であるというなら、結果が単一であれば原因も単一であるというのはどうしてか? [また、]全体[の一部でも]覆われれば全部覆われる[ことになる]、[全体は単一であるので、]結合に違いはないからである。[あるいは、]部分は覆われても全体は覆われない、というなら、]部分が覆われても[全体が覆われることには]ならないので、全部が見えることになる。部分を介して[全体が]覆われるのなら、何も見えないか、全部が見えることになる。[反論]「単一であっても、全部は見ることではできないからである。」[答]見えているものと見えていないものがどうして単一なのか。赤さとの結合についても、これを同じ困った帰結がある。」(PVBh 93, 7-14 : dravyaṃ hi nāmāvayavirūpaṃ kriyāvad guṇavat saṃyogādīkāraṇaṃ samavāyīkāraṇaṃ / tasya yadi kriyā 'sti\* tadā tatsamavāyīkāraṇatvāt\*\* sarvam eva calatīti prāptam / calitācalitās citro 'vayavi cet / devadattayajñadattādirūpā eka eva calitādirūpo 'vayavīti prāptam / atha dṛṣyeta ekatvaṃ calitācalitvatvaṃ ceti ko virodhaḥ / kim idam ekatvaṃ nāma / yadi pratibhāsābhedaḥ sa nāsti / athaikakāryatāsā yadi nāmaikaṃ kāryaṃ kāraṇaṃ apy ekam iti kuta āvaraṇe 'vayavinaḥ sarvasyāvāraṇaṃ saṃyogāvīśeṣāt / avayavyāvāraṇe 'vayavino na prāpnotīti sarvaṃ dṛṣyeta / avayavadvāreṇāvāraṇe na kiñcid dṛṣyeta sakalam vā / ekatve pi sarvasyāpi draṣṭum aśakyatvād iti cet / dṛṣṭā dṛṣṭayoḥ katham ekatvaṃ / rāgayoge 'py ayam eva prasaṅgaḥ / \*nāsti とあるのを Tib により訂正。 \*\*tatsamama-とあるのを訂正。)

38) デーヴェーンドラブッディはそれぞれの帰謬還元についても推論式を提示している。上記注33), 35) 参照。

39) PVV (M1) (M2)ともに nāsty ekasmin nāsty とあるが、PVV (M) ms により nāsty に訂正して読む。

40) デーヴェーンドラブッディ「身体や壺などは、それ故、単一の集合体としては存在しない。直前に述べられた理由から。[これは以上の議論の]結論である。」(PVP 39a7 : lus dang bum pa la sogs pa'i // de phyr tshogs pa gcig yodmin / bshad ma thag pa'i rgyu'i phyr ro zhes bya ba ni mjug bsdu ba'o // )

41) ヴィブーティチャンドラの記述に以下の説明がある。「覆われた部分とは全体は異なるという説においても、全体が見えることになるという論証されることがないことによって、覆われた[部分]とは異なるという論拠がないことになる、という[帰謬]還元がある。また、それゆえ、[部分と全体は]ことならないという説の場合と同様に、すべてが覆われるなどということになる。」(Vibh p. 42, fn. 1 : āvṛtāvayavād avayavibhedapakṣe 'pi avayavidarśanaprasaṅgasya sādhyasyābhāvenāvṛtād bhedasya sādhanasyābhāvo viparyayaḥ / tatas cābhedapakṣa iva sarvāvāraṇādī syāt / )

なお、86b の anekatve 'pi pūrvavat についてマノーラタナンディンはこのように、「[部分と全体が]同一でない場合

でも (anekatve 'pi) 前 [ の同一であるという場合 ] と同様 [ に、帰謬還元がある ] と 単一な全体 説に対する批判の一部として読んでいるが、他の注釈者の理解はこれと異なる。

デーヴェンドラブッディは「多数であっても [ 原子が集合する ] 前と同様に、…」と読み、想定反論の一部として86c dにつなげる。この理解によれば、単一な全体 説に対する批判は86a で終わり、86b から 多数の原子の集合体 説が検討されることになる。「[ 反論 ] もし、二つの原子から成るものなどと順に集合したものが単一の全体として存在しないのなら、その場合、多数であると認められても、諸々の原子の状態ではそれは前には超感官的なものであるの、後にも同じ [ 超感官的な ] ものであろう。それゆえ、前と同様に、違いはないのだから、超感官的なものとなろう。微細なものであるから、原子は前と同様に、たとえ集合しても、超感官的なものに他ならない。したがって、知られないことになる。すなわち、誰にも見えないことになる。」( PVP 39a7-b2 : gal te rdul gnyis pa la sogs pa'i rim gyis (D ; rims kyis P) brtsams pa'i yan lag can gcig yod pa ma (D ; om. P) yin pa de'i tshe / du ma nyid yin na yang (P ; na D) khas len na yang ji ltar rdul phra rab rnam's kyis gnas skabs de sngar dbang po la sogs pa yin na / phyis kyang de nyid yin pa de ltar na / sngar bzhin khyad par med pa'i phyir // dbang po las 'das pa nyid du 'gyur ro // phra phyir de rdul phra mo gang yin pa de dang de dag ji ltar sngar yin (D ; bzhin P) pa de ltar tshogs su zin kyang / dbang po las 'das pa nyid yin no // de ltar na mi rtogs pa ste 'ga' zhig gis (P ; shes D) kyang mthong ba thob par mi 'gyur ro // Cf. PVV (R) 337a5-6. )

プラジュニャーカラグブタも同様に想定反論の一部として86c-dにつなげて読んでいる。「[ 反論 ] 「もし身体は [ 単一なものではなく ] 多数であるというなら、多数であっても前と同様に過失がある。原子の数だけ自己認識があることになる。[ 原子と ] 異なるのだから、[ 身体は ] 知られない。」[ 答 ] こういうことはない。違いがないことは成り立たない。」( PVBh 93, 18-19 : yady anekah kāyah / anekatve 'pi pū rvavad doṣaḥ / pratiparamānu svasamvedanaprasaṅgaḥ / aviśeṣā nna gati ś cet / naitad asti / aviśeṣa eva na sidhyati / . . . )

これらによればマノーラタナンディンの区切り方だけ特異である。86b からは87につなげて読むほうが自然のようにみえる。

- 42) PVV (M1) (M2) ともに atha とあるが、PVV(M) ms により atha vā に訂正して読む。
- 43) 「相矛盾する属性が結びつくこと」( viruddhadharmādhyāsa ) は、PVSV 20, 21-22 において、ものの差異の定義として述べられるものである。
- 44) このような自立論証はダルマキールティの後継者達の作品中にみられる。例えば、ダルモッタラは以下のような推論式を述べている。「【遍充】矛盾した属性をもつものは単一ではない。異なった壺などのように。【主題所属性】単一のものと考えられているもの(全体)も矛盾した属性をもつものであると知られている。…これは 能遍と矛盾するものの知覚 である。」( PVinT (Dh) 145b3-5 : 'gal ba'i chos dang ldan pa de ni gcig ma yin te / dper na tha dad pa'i bum pa la sogs pa bzhin no // gcig tu mngon par 'dod pa'i don yang 'gal ba'i chos dang ldan par mthong ba yin no // . . . khyab par byed pa 'gal ba dmigs pa'o // ) シャーンタラクシタ、カマラシーラにも見られる。(注22) 参照。) 他のもについては船山 [ 1990 ] 参照。

(未完)



A STUDY OF THE PRAMĀṆASIDDHI CHAPTER  
OF PRAMĀṆAVĀRTTIKA (11)

Masahiro INAMI

*Department of Philosophy and Ethics*

Topical Outline of The Pramāṇasiddhi Chapter of Pramāṇavārttika (11)

II. 1. A. a. (3) Proof of saṃsāra	
II. 1. A. a. (3). i. Cārvāka's objection	
II. 1. A. a. (3). ii. Reply	
II. 1. A. a. (3). ii. 1. The mind is not based on the body	
II. 1. A. a. (3). ii. 2. The proof of the existence of past and future lives (I)	
II. 1. A. a. (3). ii. 3. The proof of the existence of past and future lives (II)	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-1. The proof of the non-existence of other lives criticized	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-2. The body is not the cause of the mind	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3. Refuting that the defective body is not the cause of mind	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-1. If the body is the cause of the mind, the mind would not cease as long as the body exists	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-2. Prāṇa and apāna are not the cause of the mind	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-3. For Buddhists, the fault does not occur	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-4. Refuting the opponent's view that the body defeated by a disorder of the humours is not the cause of the mind	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-5. The effect can never transform without the transformation of the material cause	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-6. The reason why the body and the mind are coexistent	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-7. There is no dependence between the two coexisting things	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-8. The effect can never transform without the transformation of the material cause (II)	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-9. The cause of rebirth	80-81
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-10. Intermediate existence	82-83
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-11. The body, taken as a unity or as a multiplicity, cannot be the cause of mind	
II. 1. A. a. (3). ii. 3-3-11-1. The body cannot be regarded as a unitary whole	84-86ab

(To be continued.)